

2017年8月2日

立教大学国際学術研究交流制度  
2017年度「招へい研究員」報告書

1. 招へい概要

受入 教員	所属・職	文学部・教授
	氏名	澤田 直
受入学部・研究科・研究所		文学部
招へい 研究員	所属・職	Distinguished University Professor, Department of Cultural Studies & Comparative Literature, Stony Brook University   The State University of New York 協定の有無：無 所在国：米国
	氏名	Robert Harvey
招へい期間		2017年7月3日～2017年7月19日（17日間）
研究経費		479,110円

2. 滞在中の活動

来日および離日を含め、滞在中の活動を記入してください。全日程（毎日）記載する必要はありません。講演会やセミナーなどを開催した場合はタイトル、会場、参加者数等を記載してください。

活動内容記入例）〇〇について研究討議、共同研究、講演、講義、大学院生への研究指導等

年月日	活動内容
2017年7月3日	来日
2017年7月6日	セミナー「ミシェル・フーコーと文学」15人
2017年7月8日	立教大学フランス語フランス文学会第6回大会での特別講演「《他なる空間》の善用」40人
2017年7月11日	マルグリット・デュラスについての研究討議
2017年7月15日	公開講演会「サルトルによる「自己欺瞞」概念の現在性」（日本サルトル学会との共催）35人
2017年7月18日	大学院生への研究指導
2017年7月19日	離日

### 3. 研究・交流状況および成果

上記に記載した活動について、具体的な研究・交流の内容および成果を、本学の学術研究、教育活動、国際交流の進展へ与える効果を含めて、記載してください。講演会やセミナーなどの参加者層（学生、大学院生、一般、教職員等）、会場の様子なども記載してください。

2週間強の滞在期間ではあったが、研究・交流に関してきわめて充実した成果が見られた。ロバート・ハーヴィー教授が所属するニューヨーク州立大学ストーニーブルック校と本学の間に協定関係はないが、受け入れ教員澤田とは、シンポジウムなどを通じて交流が続けられてきた。今回の滞在を機に、研究交流がより進展したのみならず、日本のフランス文学・思想専攻の研究者との幅広い交流も行われたことは、本分野における立教大学のプレゼンスを高めるにも寄与したことと思う。以下、滞在期間内の活動を簡単に報告する。

7月6日（木曜日）には、本学の大学院生や若手研究者向けのセミナー「ミシェル・フーコーと文学」を行った。パワーポイントを使い、受講者の質問に丁寧に答えるもので、参加者との対話が十分に行われる充実した内容であった。懇親会では、性格温厚で親しみやすいハーヴィー先生を囲んで、学生たちが遅くまで議論をしていたのが印象的であった。

7月8日（土曜日）には、立教大学フランス語フランス文学会第6回大会において、特別講演「*«他なる空間»の善用*」を行った。1時間に及ぶ講演の後、会場と30分近くにわたり、濃密な質疑が行われた。その後の懇親会においても、専任教員を中心に学術及び教育状況などに関して、有意義な意見交換がなされた。

ハーヴィー教授はフランスの作家マルグリット・デュラス研究における第一人者であるが、本学は、日本におけるデュラス研究の拠点であり、本学出身の研究者との研究討議が7月11日（火曜日）に行われた。

7月15日（土曜日）には、日本サルトル学会との共催で、公開講演会「サルトルによる「自己欺瞞」概念の現在性」が行われた。単に哲学者の思想を祖述するのではなく、現代的な問題とリンクされる内容は多くの刺激を与え、講演後の質疑も極めて活発で、参加者から称賛の声が寄せられるたいへん満足いく講演会であった。

7月18日（火曜日）には、学部生／大学院生へのきめ細かい研究指導が行われた。とりわけ、現在、卒業論文、博士論文で、ハーヴィー教授の専門領域に関連した内容を扱っている学生に対して、専門的な指導が行われ、学生たちにとってはかけがえのない授業となった。

以上のような充実した内容によって、今回の招聘は成功裡に終わったものと確信している。

（ご講演中のハーヴィー教授）



(講演会の様子 (7月8日、7月15日))



(講演会の様子 (7月8日、7月15日))

